

制約された状況下における正課外学生プロジェクトチームの活動経験に に対する参加学生の意識調査

Opinion surveys of student members of the extra-curriculum student project team on activities experiences under restricted pandemic situation

千歳科技大理工 長谷川 誠

Chitose Inst. of Science and Technology, Makoto Hasegawa

E-mail: hasegawa@photon.chitose.ac.jp

1. はじめに

正課外で活動する学生プロジェクトチーム・理工工房は、20年間近くに渡って小中学校、認定こども園、児童館、科学館、各種イベント等で実験授業、科学教室、実験デモンストレーション等を積極的に実施してきた^[1-2]。2020年度の活動は大きく制約されたが、顧問としての筆者は、通常と異なる環境下での活動はかえって学生メンバが成長する良い機会となったと感じていた^[3-4]。今回、学生メンバに対するヒアリングから、困難な状況下での活動に対する学生の意識を探った。

2. ヒアリング内容

ヒアリングの対象は2020年度当時に学部2年生であった現3年生6名で、以下の質問に自由記述形式で回答してもらった(実施時期は2021年6月上旬)。

- (1) 2020年度の活動の中で印象に残っているイベントは？ それは、どういう理由からですか？
- (2) 2020年度の活動で、自分なりに工夫した点はありましたか？
- (3) 2019年度の活動に比べて、2020年度の活動で困ったこと、大変だったことはありましたか？
- (4) 2020年度の活動の経験で、自分にプラスになったと思えることはありますか？

3. ヒアリング結果より

紙面の都合からここでは一部のみの紹介となるが、設問(3)に対しては、活動時間の制約や活動形態の変更が挙げられるとともに、後輩の育成や経験の伝承が十分にできていない点が挙げられた。一方、設問(4)に対しては、「限られた時間内での活動になったために常に期限を意識して予測しながら準備するようになった」「事前に計画して行動するなどスケジュール管理ができるようになった」「限られた条件下でどのように準備・運営するかなどでアイデアを出す機会が多くなって自分たちで考える経験が積めた」などの回答があった。

4. おわりに

厳しい環境下での活動を強いられた2020年度であったが、顧問として筆者が参加学生の活動の様子を見ながら感じていたように、学生自身も何らかの経験・スキルアップの機会になったと感じていた。特に、後輩の育成を気にする声が複数の学生から出た点は、学生の成長を感じさせた。

参考文献：(1)長谷川, 科学技術コミュニケーション, 26, pp.3-16 (2020-3) (2)長谷川, 物理教育, 68(1), pp.42-45 (2020-3) (3)

長谷川, 2021年第68回応用物理学会春季学術講演会講演予稿集, No.19p-Z01-8 (2021-03) (4)長谷川, 2021年大学教育学会第43回大会発表要旨集録, pp.189-190 (2021-06)